



2011. 12

No.11

スティーティ ありがとう

認定 NPO 法人 C.P.I 教育文化交流推進委員会
 発行所：C.P.I スリランカ事務所
 Mahindarama Road, Etul-Kotte, Kotte, Sri Lanka

日本本部：東京都三鷹市中原 2-16-9 Tel: 0422-49-3808
 E-mail: cpimate@gmail.com
 URL: http://www.cpi-mate.gr.jp

スリランカに新しい支援を！！

C.P.I.とSNECCの新たな船出に

C. P. I. Japan 会長 小西菊文
 SNECC 事務局長 M. チャンダシリ

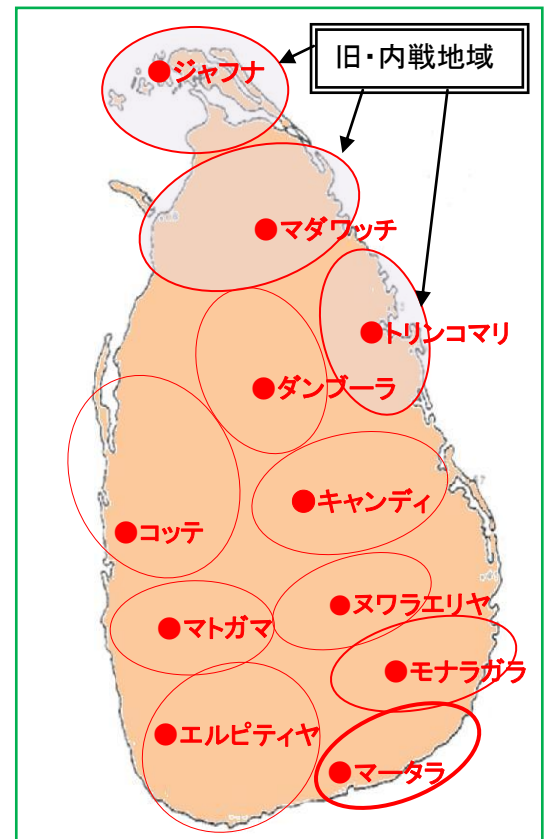
旧・内戦地域で教育里子プログラムを始めよう

C.P.I.に賛同され、スリランカの子どもたちを思って下さる皆さま、長年のご支援に感謝申し上げます。C.P.I.とSNECCとの関係が始まって25年になります。

これを機に、新たな船出を、と評議員会から建議があり、今回私たちふたりは、SNECCの副事務局長・事務長も同行して、2004年以來7年ぶりに北部の旧・内戦地域（とくにジャフナ地方を）訪れました。

C.P.I.の教育里子プログラムを新たに導入するために必要な条件を調査し、整えるためです。

スリランカでは、26年続いたLTTEとの内戦が終わり、その後の政府軍による統治も二年目になりました。そこで、内戦後の子どもたちのケアと、地域に根付いた住民生活の向上を視野に入れて、ジャフナ地域を調査してきました。



里子支援のために構成した11のブロック



まず、住民の状態を把握しなければなりません

貧しい人々の多くが生活の糧を求めているのは漁業です。ジャフナの街中は内戦中も守られていたので破壊は少ないが、一歩郊外に出ると、まだまだ悲惨な状況です。そこで、定住した家庭の教育里子を選ぶ必要があります。ほとんどの住民は、タミール語しか話せません。これは、子どもたちも同様です。ですから、子どもたちとのコミュニケーションを図るために、シンハラ語—タミール語の通訳を出来る人を探しようやく良い人に依頼できそうです。また、教育里親や専門家の方が訪問されたときのために、安全で、安心できる交通手段や宿舎を確保しました。P-3から、順次ご説明しますので、ご理解をお願いします。

**教育里子プログラムでは、
地域性を考えた選考基準が大切です。**

1986年に教育里子プログラムを発起し、1989年にC.P.I.とSNECCが、協働で13の地域センターをつくったときは、大変でした。しかし、いまでは、前ページの地図にありますように、11のブロックに117の地域センターを置いて、活動の信用を得ています。

ところで、通常、C.P.I.-SNECCが協働する教育里子プログラムは、定住していて、家庭経済が困難ではあるが学校成績優秀な子どもたちに、手を貸す活動です。

ところが、スリランカは小さな島ですが、地域により文化が少しずつ異なります。家庭の状況は、一括りに考えられません。

ジャフナ地方は、とくに、貧しい住民のほとんどが、漁業に生活の糧を得ています。この環境で支援すべき『優秀な子ども』、の意味を、この地方ではどのように定義すべきか、が大切です。

小西会長は、「とくに漁業の向上に熱心な子どもを選び、地域社会に貢献できないか」という意見を出して、SNECCと協議中です。

いまのところ現地理事会は、「進路を決めるのは、子ども次第。そのための勉強を、したくてもできない、頭のいい子どもへの勉学支援に限ったほうがよい」が多数意見です。

教育里子同士の交流は、民族融和に一役

平和が訪れたいま、シンハラ族と北部タミール族の教育里子たちとの交流は、心の奥の奥を癒していくために大切なことです。教育里子プログラムには、子どもたちの研修旅行がありますので、両民族融和に一役をはたすため、交流機会をつくろうと考えています。

キリスト教の牧師さんに地域リーダーを依頼



POINT PEDRO 地域のダミオン神父(右から二人目)



JAFFNA 地域のスマン神父、ロイ神父(前列左二人)



NAINATIVE 地域の アリアキティお坊さん(右)

C.P.I.小西会長のブログを、友人、知人にご紹介ください

<http://ameblo.jp/cpimate/>

10月からのブログの内容は、「若い人たちを育てたい」「スリランカで見聞きしたこと」のテーマで、教育里子制度の内容が、やさしく語られています。

ほとんど毎日更新されています。ご友人にもブログのご紹介をお願いします。

ジャフナ地方の紹介

C. P. I. 小西会長の手記



■内戦の爪痕は、いたるところで見られる

ここに並べた三枚の写真は、ジャフナ地方郊外のお金持ちが住んでいた一帯の様子だ。

1994年頃に破壊されたとのこと。

多くの子どもたちが、親をなくした。

こんど私たちの POINT PEDRO の拠点となって下さるダミオン神父のカウンセリングセンターでも一時は孤児を270名も預かっておられた。

いまでは、70名ほどの子どもが、そのセンターの補習クラスで学んでおり、皆んな元気いっぱいだ。

「最初の頃、引き取ったはいいいけれど、精神的に病んだ子どもたちのケアに、私自身が苦しかった」とダミオン神父は、しみり語っておられた。



私見では、6年生の年齢から学校を訪ねて回り、日本の私たちに親しみをもってもらって、8年生で選考し、9年生で支援開始とするのがよいと、考える。とりあえず今は、来年9年生または10年生になる奨学生の候補を選びにかかっている。

■塹壕を掘る作業から、街づくりの作業へ

P-1 に書いたように、ジャフナ地方は政府軍が統治している。

内戦の当時は、塹壕を掘ることと、LTTE がジャングルの地下に造ったトンネルを発見して掃射する作業の毎日だったという。

政府軍の塹壕。
LTTE のトンネルも
つぶさに見た。
かなり深い。



いま、陸軍の兵士たちは、荒れた山林の植樹や街の清掃運動に励んでいる。道の舗装も軍の仕事だ。

植林を勧める看板



清掃を勧める看板は、協賛会社を得て、いたるところに立っている。

■軍と住民たちとの関係

コロンボなど他の街で、数年前に、テロによる都市部の破壊行動が懸念された頃、兵士たちは殺気だち、人々の気持ちは複雑そうであった。

「守ってくれるのは有難いが……………」

との言葉に、印象どおりだなと感じたものだ。それに反して、ジャフナ地方では、軍の兵士に対する住民の見方・感じ方は、まったく違う。

「怖い状況から解放してくれた人たち」との受け取り方で、親近感が強いようだ。

窃盗などの小事件も少ないらしい。

街で駄菓子屋の前にいた女性に、自転車の鍵をつけずに駐輪して大丈夫かと尋ねると、

「せっかく生き延びてここにいるのに、つまらない争いをおこしたら、(昔スリランカの争いを収めた)お釈迦様に申し訳ないでしょ」

との答えが返ってきた。



ジャフナの街。
活気がある。

一方、海軍はといえば、違法な漁業（底引き網など）の摘発に励んでいた。

「我々は、生活改善にも取り組んでいる。違法な漁法は、ここの豊かな資源を壊すので取り締まっていかなければならない」
その昔にお釈迦様の到来されたという島に、私たちは渡ったときに船を用意してくれた、海軍の兵士の言葉だ。まさに統治していると思う。

海軍の小型船舶で
渡る



■教育里子を訪問して戴くときの調査状況

C. P. I. が教育里子プログラムを行うとき、日本の会員さんに報告できる状態にあるか、日本の会員さんが安全に訪問できるか、このふたつは必要な条件である。

C. P. I. は、『ふつうの人々が、安心して参画できる国際協力』を推進する目的があるのだ。

そこで、会員さんが宿泊するときのため、値段が手頃で清潔な宿泊ホテルを探したが、なかなか見つからなかった。困っていると、北部司令官の補佐官をされているアディッタさんが、ジャフナ郊外の軍の保養所を提供すると申し出てくださった。



私たちは、軍の宿舎に泊まっていて『保養所』のイメージがわからず、半信半疑で拝見しに行ってみると 写真でご覧いただけるような立派な施設。これなら、会員が教育里子を訪問される際にも、安心して戴けると思う。

アディッタ氏と
軍の宿舎前で



■ジャフナへ旅するときは、ゆっくり構えること

スリランカへ旅する方にすべてあてはまるのかもしれないが、とくにジャフナ地方へ行くときは、気持ちをゆっくり構えることだ。

飛行機も、軍の経営する会社。

私たちが行ったときは、輸送機を改造したもので、耳をつんざく音のなかの飛行だったが、今年中に新鋭機をいれて快適になる。

らしい。（たぶん大丈夫だろう）

写真で見られるように、発着場の、のどかさを楽しめるのも今のうちかもしれない。



この辺の海はきれいだが、海辺には、リゾートホテルもレストランもない。私たちは、今回、軍の休息所で昼食を戴き休息した。



ここは、海岸沿いを監視する兵士たちが、交代で24時間当直をする詰所があり、その兵士たちが休息するために作ったとのこと。粗い造りだが、昼食は美味しかった。

「スリランカの軍隊は、食事はいいですよ。楽しみは、それしかないのですからね」と、前述のアディッタさんは言われていた。



この写真の建物は、廃墟と思われるだろうが、さきほどの、海岸を監視する兵士たちが詰めている建物である。テロの攻撃で壊れた家を、譲り受けて使っているとのことだ。このように、軍は贅沢せず市民を守る姿勢で、支持を受けている。

■街中は、自転車での通学、通勤が多い

ジャフナ地方のもうひとつの特徴に、自転車が多いことがあげられる。

日本のような変速ギヤつきではないので、ユックリズムな感じだ。事故もない。

バイクが少ない分、自転車が多いとのことで歩行者も車も、バイクの乱暴運転に対するような怖い緊張をしなくてもすむ。



下校する子どもたち

とにかく、26年間におよび内戦が終わった地域なのだ。

なにをするにもゆっくりと、温かい気持ちで対していくほうがいいと感じた。

教育里子プログラムの新たな船出も、のんびりとやろうと思う。

ジャフナ地方をはじめとする旧・内戦地域の教育里子を受け持たれた方は、安心して子どもたちに会いにきてください。

<http://ameblo.jp/cpimate>

2011年10月30日(日)
cpimateの投稿

❖ お金がないからこそ、できることもある

テーマ: 若い人たちを育てたい

世界でも難関と言われるスリランカのアドヴァンスレベル試験。
合格者は、大学へはいる資格を得る。
この試験に、全国第二位で合格した子どもと、今日、会うことができた。
彼女を、小さな13歳のときから、C.P.I.の私たちが奨学金で育ててきた。
だから、嬉しい。



この子どもの家庭は、家がなく、親戚のところに同居して暮らしていた。
毎日10Kmもの距離を歩いて学校に通っていた。
高校のときは、塾の先生のアルバイトをして月に3,000円を稼いだ。
『それっぽっち』かもしれないけれど、親を助けることができた。

13歳のときから、目の輝きをもっていたので、
私たちは奨学金を出して彼女の勉強を励ましてきた。
「C.P.I.の奨学金の仲間がいて、心の支えになった」と、彼女は言う。

会計士として外国へ行き修行したい、
「いつか日本に行き、里親さんの三重県の松岡博子さんにお礼がしたい」
しっかりした声で話してくれた。

この子ども（名前は、ビネシュカ デシャーニさん）をはじめとして、私たちの教育里子たちは、驚くほどの成績で高校を卒業していている。

彼ら彼女たちもまた、家庭経済に恵まれず、お金がなかったからこそ、私たちの励ましに素直に応えてくれたのだと思う。

25年間この活動をしてきて、いま私は63歳になったけれど、生きている限り、この仕事を続けたいと、最近強く思っている。

ここまでこられたのは、私にお金があったからではない。

私がC.P.I.の組織をつくりあげたとき、教育里親の仕組みづくりと初めの三年間の活動で、自分のお金を使い果たしていた。でも、だからこそ、会員である教育里親のみなさんと心ひとつになった。みんなの代わりになんでもしよう、だから、奨学金とは別に事務局を支えてくださいと言えた。

里親さんがしたいこと、知りたいことを、実現し、調べ、話し合い、報告することに全力をかけてきた。現地のボランティアのみなさんも応えてくださった。その毎日は、子どもたちの力強い笑顔で報いられている。

子どもたちが一様に話してくれる言葉を書きおきたい。「奨学金でいちばんよかったことは、海の向こうの里親の人たちがわたしたちを信じてくれたことです。責任があるから頑張れました」

そう言ってくれて、どうもありがとう。

あなたの教育里子はあなたのおいでをお待ちしています。
どうぞ、スリランカにいらっしゃってください。
職員一同、心から歓迎いたします。





スリランカ 現地事務所から

アジアの優等生！ スリランカの国際郵便

スリランカで、郵便のドア to ドア サービスが始まった。契約しておく、郵便を取りに来てくれる。便利。日本の宅配便会社がしている「メール便」サービスと同じ。民営の郵便サービスで、スリランカでは、はじめての試み。



以前、スリランカ内に配達すると届かないことがあった。郵便局員が配達途中で、予定していた人と同じ村の人に会うと、その人に郵便物を託してしまい、託された人が忘れて「はい、それまで」ということだ。日本からの手紙の場合、次のような例もあった。託された人が、「いいものが入っているかも」と開けてしまい、何もなければ捨ててしまった事件である。

民営郵便サービスではそういうことが起きない。民営会社に郵便サービスする権利を与えた結果だ。「民営化」とは、そういうことだろう。

ところで、アジアの中で、国際郵便の速さを競うと、スリランカは非常に優秀。EMS 便は、日本の相手まで3日で到着する。どれだけスリランカの国際便発送システムがよいか、一目瞭然。ちなみに、距離的に半分ぐらいのインドネシアからの EMS は、日本まで 10 日もかかる。スリランカのシステムを他国に教えられるようにしたいものだ。

SNECC 地域センターの統廃合が、 本年 12 月に行われます

現地における教育里子プログラムは、地域センターの実務者による奨学生選考、日常ケア、問題が起きたときの早い対処が必要です。教育里子たちには、日本の里親さんに手紙を書くことも含めて、年間の決まりごとを書いたルールブックを渡しています。

しかし、地域センターの管理がルーズですと、子どもたちは、「勉強が忙しいから」との理由にかまけて、決まりごとを怠るようになります。

そこで昨年、地域センターの評価を行ってきました。その結果が、本年 11 月 11 日の SNECC 理事会で発表され、処遇をどうするか話し合われました。

結論から申し上げますと、問題の多い地域センターを閉鎖することに致しました。

ひとつ大きな課題は、まだ奨学生がいて、教育里親さんがついている場合、どうするかです。

問題のあるセンターは、数年来、新規の奨学生を選考しませんでしたから、残っている子どもは AL 課程後期の奨学生だけです。

そこで、この際、そのような子どもを『管轄外』とすることで「教育里子」から離し別個管理することに致しました。

対象となる教育里親の方々には、本年 12 月の里子報告でご了解をお願いする所存です。

ご理解ご協力をお願い申し上げます。



会議の終了後に撮影して戴きました。